
特集にあたって

やま ぐち ひろ いち
山 口 博 一

この「英連邦と発展途上諸国」特集を手にした方は、あるいは、今日の途上諸国にとって英連邦はそれほど重要な意味をもつものだろうかといぶかしく思われるかもしれない。しかし、今日の世界の焦点のいくつか、たとえばイランとイラクの戦争、フォークランド領有をめぐるイギリスとアルゼンチンの戦争、イスラエルとパレスチナ、南アフリカの人種政策、ブラック・アフリカから南アジアにいたる広大な地域での貧困の問題などは、いずれもすこしその背景をたずねるならたちどころにイギリス帝国と英連邦の歴史に行き当るのである。

本特集はアジア経済研究所の調査研究部が主管した同名の研究会（昭和54～56年度）の報告である。この研究会は主査である私のほかに研究所から林晃史、今井圭子、小池賢治、安田信之、オブザーバーとして中村弘光の5名、所外から梶谷素久、藤田進の両氏が参加して構成された。われわれがこの研究会で目的としたところはおよそ以下のように要約することができる。第1、イギリス帝国および英連邦が今日の発展途上諸国にのこした遺産を具体的に確認する。いいかえれば今日の途上諸国研究の見地に立ったイギリス帝国と英連邦の歴史の批判的総括を行なう。第2、今日の英連邦はかつてのイギリス帝国とはことなっており、経済的、政治的、軍事的な一体をなすものではない。逆にいえば、英連邦の研究をひとつの中間点としてより広く世界的な視野に立った途上国研究にいたることができるはずである。第3、このようにして途上国研究とイギリス帝国、英連邦研究とを結びつけ、途上国研究にひとつの新しい視角を提供する。第4、遺産は多面的なものであるから、政治あるいは経済に研究を限定せず、多面的に考察する。第5、あくまでも現在の時期を解明することに主眼をおく。そのため歴史に深入りすることをさけ、ほぼ両大戦間の時期から今日までを共通の研究対象とする。

このようなねらいをもって発足した「英連邦と発展途上諸国」研究会は、議論を重ねた

末、オブザーバーの中村をのぞいた各メンバーが以上の大枠の中でそれぞれの方法と関心にもとづいて論文を執筆し、これにメンバーではなかったが同様の関心をお持ちの香川孝三氏の論文、イギリス帝国研究と途上国研究を結びつける上でのほとんど唯一の先学といってよい山田秀雄氏の研究随想、われわれの意図を理解された中岡三益、木畑洋一両氏の書評を加えてでき上がったものがこの特集である。でき上りをみると、カバーされていないことがいくつか目につくが、とくに、イギリス自身の経済と帝国ないし英連邦の経済を貿易、為替、投資を含めて全体として包括的に論じたものが欠けており、ブラック・アフリカの研究、これに関連してとくにブラック・アフリカについてのフランス帝国との比較もほしかった。というのは旧仏領ブラック・アフリカ諸国のフランスとの結びつきは英連邦ブラック・アフリカ諸国とイギリスとのそれよりも一段と強いからである。その他にも、問題領域では労働移民、コミュニケーション、地域では東南アジア、南太平洋などを欠いている。また、特集の全体を通じてイギリス帝国のもつ底知れぬおそろしさをどこまで描きえたか疑わしい。しかし、この特集はまだ第一期工事でありその上にさらに積み上げがなされるべきものである。そのために最小限必要な問題提起はなしえたのではないかと考えている。

この特集でカバーすることができなかった諸問題については、多くの場合あるいは適切な執筆者をうるることが可能であったかもしれない。しかし、両大戦間期以降についてのイギリスをも含めた全体としての帝国ないし英連邦経済という問題については、そのことが可能であったとは考えられない。英連邦研究のような場合には、いかに途上国に主眼をおいた形ではあっても、途上国研究の側だけでは限界があるから、ぜひともイギリス研究の助力をえなければならない。しかし、今回の共同研究を通して痛感させられたことのひとつは、日本のイギリス研究は高い水準に達しているとはいえ概してイギリスの旧植民地にはほとんど注意をむけていないということである。同時に、欧米研究と欧米の旧植民地研究がこのように分離していることにたいしては、ともするとたて割りの国別の研究にはまりこむ傾向のある途上国研究の側にも責任がある。その意味で、この共同研究によって途上国研究の側から途上国研究と欧米研究の協力のひとつの可能性を示唆することができたのはわれわれのささやかなよろこびとするところである。